ポスドク研究者，大学院博士後期課程学生等国際学会派遣プログラム		
Embodied memories and places: Female migrant narratives about karamushi in Showamura, Fukushima prefecture		
氏名　久島　桃代		グローバルリーダーシップ研究所 特別研究員
期間	2018 年　8 月　5 日～　2018 年　8 月　12　日	
学会・分科会名	The 2018 International Geographical Union Regional Conference, Sustainability of Rural Systems	
場所	ケベックコンベンションセンター，カナダ・ケベック・シティー	
発表者名，発表形式	Momoyo Kushima，口頭発表	

内容報告

1.本発表の内容

1.1　発表内容の概要と意義

本発表では，日本における田園回帰の潮流の中で，農村という場所がそこに移住する若い女性たちによってどのように意味づけられていくのかを検討する。その際に発表者が意図するのは，空間や場所が言語を通じた表象によって規定されるとする立場を超え，身体性や物質性を加えた相互作用からこれらを捉えようとする非表象地理学の立場である。

発表者のフィールドである福島県昭和村では，「からむし」[1)]と呼ばれる植物を素材とする織物作りが行われ，女性移住者を呼び込む体験制度[2)]も実施されている。本発表では，独身の女性移住者たちが，からむしの栽培に参加するなかで，身体性や物質性をともなう営みに埋め込まれた地域の記憶を理解し，それを引き継ぐ者として自らを位置づけていく過程を明らかにする。また本発表では，農村共同体から陰に陽に「花嫁」「産む性」という役割を期待されがちな若い女性移住者たちの葛藤にも言及し，容易には解消し難い葛藤を抱えた女性移住者たちが，織物生産の身体的経験という回路を通じて，農村という場所とそこに暮らす人々に接続されていく様子と，このことが農村社会のジェンダーに持つ意味も考察する。田園回帰をめぐる既存の議論では十分に検討されていないジェンダーの問題[3)]に踏み込みたい。

本発表は，英語圏の非表象地理学の理論に，日本における移住や田園回帰という今日的な問題を結びつけた地理学的研究として，海外への発信力を持つ。また，これまで十分に検討されてきたとは言い難い「移住者たちのジェンダー」を主題的・批判的に扱ってもいる点でも意義深い。以上の点から，国際的な基準に合わせた女性研究として，グローバル女性リーダーの育成を目指す本助成の目的にも合致していると思われる。

1.2 学会・分科会の概要

International Geographical Union（国際地理学連合） は地理学に関する国際的な学会で，2018 年現在，40 の commission（研究委員会）と 3 つの task force（特別委員会）から成る。Commission が扱う研究課題には，応用地理学，経済地理学，文化地理学，ジェンダー地理学等，多岐にわたる。今回の発表は，農村システムの持続性に関する研究委員会にて，「農村移住とコミュニティ変化」というセッションテーマで行った。

1.3 成果と課題

都市から農山村への移住や，二地域居住といった住まいの形態は，日本特有の現象ではない。今日のヨーロッパでも counter-urbanization, second home 等の概念で広く知られている(Halfacree 2012)。今回の発表でも，海外の研究者ともある程度の対話が可能なテーマであることを改めて実感した。

しかし，将来が不透明な中で農村移住を続ける日本の若者たちの姿には，日本特有の事情が関係していると思われる。例えば，若者の移住に力を入れながらも，定住に至るまでの確固とした道筋を容易には立てられないでいる農村側の事情（図司 2013; 2014）や，一定数の日本の若者の生き方にみられる「漂流」意識（佐藤 2016）等である。特に後者の，若者と場所との「刹那的」ともいえる関係に

ついては，地理学だけでなく，農村研究全体を見渡してもまだ十分な議論がなされていない。
その意味で，地域コミュニティの中で期待されるジェンダー役割への葛藤や，不安定な経済状況により「１年先の村での暮らしが描けない」女性移住者たちに着目する本研究は，活字論文として積極的に発表していくべき内容を含んでいる。本研究は，農村に移住する若者の生き方を具体的に描き出すものであり，さらにそうした若者の生き方がジェンダーの問題と不可分に結びついていることを指摘しているからである。本発表の内容は現在『地理学評論』にて査読中であるが，完成した折には英語論文として海外雑誌への投稿も検討中である。

2. 今後の研究の見通し：研究手法としての「ライフストーリー」の再検討

本研究にあたっては，体験制度に参加した女性移住者に対し，彼女たちの人生を聞き取るライフストーリー･インタビューを実施した。これまで研究対象としてきた昭和村の女性移住者の生き方から，ライフストーリー研究における「ライフ」概念の再検討を試みたい。女性移住者たちのライフストーリーからは，からむしと関わり，昭和村で暮らし続けることを選択するという彼女たちの〈人生〉が，様々な人間／非人間との，身体性や物質性を伴った、非言語的な関わりから構成されるものであることが示唆された。しかし，これまでのライフストーリー研究では「語りとしての生（ライフ）」にもっぱら光が当てられ（足立 2013），女性たちのライフストーリーにみるような，異種混交的で非言語的な〈いのち〉のありようにアクセスしたり，これを描き出したりすることが難しい。そこで今後は，昭和村という環境の中で織りなされる，からむし織の製作を中心とした人間／非人間の関わりを具体的,詳細に検討することを通じて,女性移住者たちのライフにアクセスするための手法を構築したい。投稿先としては,『日本オーラル・ヒストリー研究』等を検討中である。

最後に，本助成により国際学会で報告する機会をいただけたことに，深く感謝いたします。ともすれば自身の研究に対して不安と焦燥感を覚える中，海外の議論に直接触れ，足元に光が射した気がいたしました。選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。

注

1) からむし織の「からむし」とはイラクサ科の多年生植物で,「苧麻」（ちょま）や「青麻」（あおそ）とも呼ばれる。その採取の容易さから，縄文時代からその繊維を利用して布が編まれたり織られたりしてきた（永原 2004)。昭和村では，18 世紀中頃からからむし栽培が行われていたことが確認されている。収穫されたからむしは,「からむし引き」と呼ばれる作業によって繊維が取り出される。この繊維が越後地方に出荷され，越後上布や小千谷縮などの高級織物の原料となるのである（筑波大学民俗学研究会 1990)。1970 年代まではからむし栽培のみ行っていたが，着物需要の低下によりからむしの価格が下落したこと，転作する者が増えたことを受けて，村独自の織物作りが始まった。
2) 体験制度のプログラムは５月のゴールデンウィーク直後から始まり,「織姫」と呼ばれる体験生（女性移住者）は翌年の３月までからむし織りに関わる全ての工程，つまり，からむしの栽培，糸作り，機織りまでを学ぶことになる。他の織物産地で行われる後継者育成のための研修とは異なり，昭和村の体験制度は体験的な要素が強い。体験期間は 11 カ月と比較的短期であり，選考にあたってからむし織や織物に関する経験は問われない。体験修了後に村に残ってからむし織に従事するかどうかも同様である。

参考文献

足立重和 2013. 語りとリアリティ研究の可能性. 山田富明・好井裕明編『語りが拓く地平:ライフストーリーの新展開』61-77, せりか書房.
佐藤一子 2016. 地域文化が若者を育てる: 民俗・芸能・食文化のまちづくり』（シリーズ田園回帰７）農山漁村文化協会.
図司直也 2013. 農山村地域に向かう若者移住の広がりと持続性に関する一考察: 地域サポート人材導入策に求められる視点. 現代福祉研究 13:127-145.
図司直也 2014.『地域サポート人材による農山村再生』（JC 総研ブックレット No. 3 ,小田切徳美監修）筑波書房.
筑波大学民俗学研究会 1990.『大芦の民俗』.
永原慶二 2004.『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館.
Halfacree, K., 2012. Heterolocal identities? Counter-urbanisation, second homes, and rural consumption in the era f mobilities. *Population, space, and place* 18: 209-224.

くしま　ももよ／お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所　特別研究員

Embodied memories and places: Female migrant narratives about karamushi in Showamura, Fukushima prefecture

Momoyo Kushima